

# 寺子屋 素読ノ会

日本の偉人のきらきら輝く、千年の叡智。  
名作古典を一冊、生涯の友とする。



## 主旨：

数百年読み継がれてきた日本の古典名著を読む“大人の”寺子屋です。

参加者のみなさんといっしょに名段落を音読。

『風姿花伝』『南方録』など世界へも紹介されるきわめつけの名作を一冊しっかり通して読み、その深い意味を知り、長く人生の糧としたいと思います。

古文の読解とともに、その時代の歴史背景や日本文化の奥深い世界にも触れていきたいと思ひます。一人ではなかなか読破が難しい古典にもう一度チャレンジしてみませんか。

## 実施要綱：

①「葉隠」「風姿花伝」「南方録」の3クラス。

②月1回、各90分。1作品を読了した時点でクラスは終講となります。

※各作品おおよそ12～24ヶ月予定。開催日は次面スケジュールを参照してください。

③サークル代表者：水野聡(HP言の葉庵主宰・能文社代表)

④参加費(施設設備使用料・資料等のサークル運営費) 1クラス1回 ¥1500

※参加費は参加当日会場にて徴収します。

⑤各コースの指定テキストは各自でご購入の上、参加当日にお持ちください。

※使用テキストは次項カリキュラム参照。※当会よりテキストのプリント提供はありません。

お忘れの場合「素読」できませんのでご注意ください。

⑥当会は、古典同好有志による**非営利目的の港区社会教育関係団体**です。どなたでもご自由に参加いただけます。初参加の場合、事前に下記宛メール、またはFAXにてご連絡ください。初回参加用資料を個別にご用意いたします。当日は、開始5分前までに直接、教室までお越しください。教室の番号は当日施設1階ロビー掲示板でご確認ください。



開講中



開講中



開講中



お問合せ先：寺子屋素読ノ会 代表 水野聡 電話&FAX 044-844-2744

メール/info@nobunsha.jp ホームページ/http://nobunsha.jp

※問合せのメールアドレスはお手数ですが◎印をアットマークに変えて送信してください。



## ■コース

コース	曜日・時間	会場／定員	参加運営費	テキスト	注意事項
A「葉隠」	毎月第2金曜 10:00-11:30	生涯学習センター ぱるーん (新橋)会議室 ※当日1階ロビー掲示板で教室番号をご確認ください。 定員／各クラス15名	各コース一回 ¥1500	「葉隠」(岩波文庫)和辻 哲郎、古川 哲史(校注) ¥842	
B「風姿花伝」	毎月第2金曜 13:00-14:30			「風姿花伝」岩波文庫 世阿弥(著) ¥638	
C「南方録」	毎月第2金曜 14:45-16:15			「南方録」岩波文庫 南坊 宗啓 著, 西山 松之助 ¥ 987	

※日程は下記スケジュール参照

お知らせ:

2022年6月より、新たにBクラス『風姿花伝』講座がスタートします。

## ■2023年度スケジュール： 2022/12/10 更新

年月	2023 1月	2023 2月	2023 3月	2023 4月	2023 5月	2023 6月	2023 7月	2023 8月	2023 9月	2023 10月	2023 11月	2023 12月
A「葉隠」	13	10	10	14	12	9	14	11	8	13	10	8
B「風姿花伝」	13	10	10	14	12	9	14	11	8	13	10	8
C「南方録」	13	10	10	14	12	9	14	11	8	13	10	8

## ■会場：

新橋 生涯学習センター  
(パルーン)

●JR新橋駅 烏森口より  
徒歩3分  
〒105-0004  
港区新橋3-16-3

※お問い合わせ先は1ページ  
目をごらんください。



## ■Aクラス「葉隠」寺子屋講座資料より

### ■テーマ：葉隠の“死”とは何か

#### ●葉隠にみる「死」のキーワード

- ・死ぬことと見つけたり
- ・只今の一念
- ・死に狂い
- ・死兵
- ・生死截断
- ・生死を離れる
- ・追腹

#### ●古来の死の表現

「天子の死を崩と曰ひ、諸侯は薨と曰ひ、大夫は卒と曰ひ、士は不禄と曰ひ、庶人は死と曰ふ」『礼記』曲礼篇より

#### ●死の名言

- ・武士道というは、死ぬことと見つけたり（葉隠）
- ・死に至る病とは、絶望のことである。  
（キエルケゴール）
- ・人は死ぬ。だが死は敗北ではない。  
（ヘミングウェイ）
- ・死は人生の終末ではない 生涯の完成である  
（マルティン・ルター）
- ・未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん（論語）

#### ●辞世の句

- ・山崎宗鑑（一五五三没 享年八十九）  
「宗鑑はいづこへと人の問うならば  
ちとようありてあの世へといえ」
- ・千利休（一五九一没 享年六十九）  
「人世七十 力圍希咄（カーッ、トーッ）吾這宝剣  
祖仏と共に殺す 埒ぐる我が得具足の一つ太刀 今  
この時ぞ天に抛」
- ・松尾芭蕉（一六九四没 享年五十）  
「旅に病んで 夢は枯野をかけめぐる」
- ・安藤広重（一八五八没 享年六十一）  
「東路に筆を残して旅の空  
西のみくにの名所を見む」
- ・乞食女（一六七二没 享年不明）  
「ながらえばありつる程の浮世ぞと  
思えば残る言の葉もなし」  
（返歌 新著聞集）  
「言の葉は長し短し身のほどを  
思えば濡るる袖の白妙」

- ・庶民の娘（年代不明 享年二十八）  
（題：湯灌いや）「おのづから心の水の清ければ  
いづれの水に身をや清めん」  
（題：経かたびらいや）「生まれ来て身には一重  
も着ざりけり 浮世の垢をぬぎて帰れば」  
（題：引導いや）「死ぬる身の教えなきとも  
迷うまじ 元来し道をすぐに帰れば」

- ・豊臣秀吉（一五九八没 享年六十三）  
「露と落ち露と消えにし我身かな  
難波の事も夢のまた夢」

- ・徳川家康（一六一六没 享年七十五）  
「嬉しやと二度さめて一眠り  
うき世の夢は暁の空」

- ・浅野内匠守（長矩）（一七〇一没 享年三十五）  
「風さそう花よりも猶我はまた  
春の名残りをいかにとかせん

- ・大石内蔵助（良雄）（一七〇三没 享年四十四）  
「あら楽し思いは晴るる身は捨る  
浮世の外にかかる雲なし」

#### ●葉隠 聞書一 二 武士道というは、死ぬことと見つけたり。

武士道とは、死ぬことと見つけたり。生死分かれ目の場に臨んで、さっさと死ぬ方につくばかりのこと。特に仔細などない。胸すわって進むのだ。うまく行かねば犬死、などとは上方風の打ち上がった武道のこと。生か死かの場面で、うまく行くかどうかなどわかるわけもない。人皆生きる方が好きである。されば、好きな方に理屈をつける。もしうまくいわずに生き残ってしまえば腰抜けだ。この境目が危うい。うまく行かずに死んでしまえば犬死で間違いである。しかれども、恥にはならぬ。これを武道の大丈夫という。毎朝毎夕くり返し何度も死んでみて、常時死に身となって居れば、武道に自由を得、一生落度なく家職も仕果たせるものである。

#### 聞書一 一一四 武士道に於ては死狂ひなり。

一一四 「武士道とは死に狂いすることである。たとえ数十人でもかかっても一人の死に狂いする者は殺せないものだ」と直茂公はいった。正気にて大業はならず。気違いとなって、死に狂いするまでだ。また武道を嗜み分別ができれば、すなわち遅れを取るることとなる。忠も孝もいらぬ。武士道においては死に狂いなり。この内に、忠孝はおのづから籠もるものである。

## ■Bクラス「風姿花伝」寺子屋講座資料より

### ■世阿弥とは

室町時代の能楽の大成者。実名、観世三郎元清(一三六三～一四四三)。幼名、鬼夜叉、または藤若。中年以降の芸名を世阿弥陀仏と称した。

申楽に音曲・作曲面で改革を行い、今日の能の基礎を確立した観阿弥の一子で、二代目観世太夫を継承する。

父親阿弥より能役者としての英才教育を、パトロンである將軍足利義満、北朝公家二条良基等により庇護、寵愛を受け高度な上流教育を享受する。稀代の美童にして歌舞の逸材でもあった世阿弥は、天賦の才に加えこれら宮廷文化を存分に吸収。民衆芸能申楽を美と幽玄を主とする総合舞台芸術、能へと昇華・大成させることとなる。

自身、太夫として一座を率いる看板役者であったが、今日なお盛んに演能される数々の名作『高砂』『井筒』『西行桜』等の作者でもあり、本作『風姿花伝』をはじめとする二十一にも及ぶ能芸論書の著作者、理論家でもあった。演者・作者・理論家を一身に兼ね備え、世界芸術史的にも稀な天才と評され、六百年を経た今日においても代表作『風姿花伝』は、その普遍的価値により海外でも訳出され、多くの読者に親しまれている。

### ■風姿花伝とは

能の大成者、世阿弥が亡父親阿弥の遺訓を基に著した、日本最古の能楽理論書である。『花伝書』の名称でも知られる本書は、「花」と「幽玄」をキーワードに、日本人にとっての美を深く探求。体系立った理論、美しく含蓄のある言葉、彫琢された名文で構成される、世界にも稀な芸術家自身による汎芸術論として位置づけられよう。全体は七編から成立する。第三編までが一四〇〇年(応永七年、著者三十八歳)、四・五編が一四〇二年、六・七編が一四一二年に、それぞれ成立。完成までに約二十年の歳月を要している。この間、増補・改訂がなされた可能性も高く、本書成立には複雑な過程が想定される。第一から第五までが本編、第六・第七は外伝ともいふべき内容だ。各編の要約は下記。

### ●各篇の要約

#### 序

申楽の歴史を簡潔に述べ、この道を行こうとする者へ守るべき芸の本流を示す。本編への巻頭言として好色・大酒・博打への戒めを掲げる。

#### 第一 年来稽古條々

申楽者の生涯を各年代別に分け、修行と工夫の方法を説く。たとえば幼、少年期の「時分の花」、青年期の「初心の花」。いずれもまことの花とはいえない

い。一時の名声に惑わされることなくまことの花を会得することこそこの道の奥義であるとする。まことの花を得た、ただひとりの例として観阿弥の古い木に残る花の舞台を引く。今日、教育論・コーチングの視点から見ても示唆に富む一編。

#### 第二 物学條々

申楽芸の根本である物真似の技術を女、老人、直面、物狂など九つの題材別に俯瞰する。鬼の物真似は「上手く真似るほど面白くなる」という秘事。また無上の大事「老人の舞い姿」など、深い人間観察と舞台経験に基づき物学(ものまねび)の本質に触れる。

#### 第三 問答條々

演能に際しての具体的、実践的演出方法および、能に花を咲かせるための工夫と秘訣を問答体で説く。「開演前の客席を見るだけで、その日の能の出来・不出来を占う方法」「序破急とは」「立会い勝負を制するには」「なぜ下手は、下手なのか」「能の位とは」「花とは何か」。問答のひとつひとつに知ることと会得することの根本的な違いが鮮やかに描き出されている。

#### 第四 神儀に云わく

元来、別書であった申楽起源伝承が後に『風姿花伝』第四として位置づけられた。申楽者に芸の正統性に対する誇りと家芸を重んじる精神の自覚を促すために書かれた一編。

#### 第五 奥儀に讚歎して云わく

「その風(伝統)を得て、心より心に伝えていく花」として『風姿花伝』書名の由来を述べる。大和申楽と近江申楽、申楽と田楽の芸風の違いを説きながら、芸の築き方や舞台に立つ心構えを示す。また芸能は「諸人の心を和ませ、感動を与える幸福の根本」であると明確に定義づけ、欲得を萌しこの道を廃れさせることのないよう強く戒める。

#### 第六 花修に云わく

花を究め、能の本道を知る手立てを表す。具体的には、まず作能の手引きとして名作の条件を示す。「音曲・働き一心の口伝」「強い・幽玄、弱い・荒いの違い」「釣合うということ」などの例を引きつつ、次第に「能を知る」ということへ導いていく。





## ■Cクラス「南方録」寺子屋講座資料より

### ■千利休

千利休 大永二年(1522) - 天正十九年二月二十八日(1591年4月21日)は中世末期、安土桃山時代の茶人。侘び茶(草庵の茶)の完成者として知られる。父は田中与兵衛(田中與兵衛)、母は宝心妙樹。父の「千」は氏であり、利休の名字は田中である、名は与四郎(與四郎)。のち、法名を宗易(そうえき)、抛筌斎と号した。

広く知られた利休の名は堺の南宗寺の大林宗套から与えられた居士号で正親町天皇の勅許による。この名は『茶経』の作者とされる陸羽にちなんだものとの説がある。茶聖とも称せられる。

和泉の国堺の商家(屋号「魚屋(ととや)」)の生まれ。若年より茶の湯に親しみ、17歳で北向道陳、ついで武野紹鷗に師事し、京都郊外紫野の大徳寺に参禅。織田信長が堺を直轄地としたときに茶頭として召され、のち豊臣秀吉に仕えた。1585年の北野茶会を主催し、一時は秀吉の篤い信任を受けた。この時期、秀吉の正親町天皇への宮中献茶に奉仕し、居士号を許される。また北野大茶会の設営、黄金の茶室の設計などを行う一方、楽茶碗の製作・竹の花入の使用をはじめると、侘び茶の完成へと向かっていく。いわば茶人としての名声の絶頂にあった利休だが、突然関白秀吉の勘気に触れ、切腹を命じられる。享年七十歳。

結婚は二回。先妻の子と後妻・宗恩の連れ子がそれぞれ堺千家・京千家を起こしたが、利休死去とともに千家は一時衰亡した。堺千家は再興せず、京千家の系譜のみが現在に伝わる。三千家は利休の養子となった宗恩の息子と利休の娘の間の子、利休の孫千宗旦が還俗して家を再興し、その次男・三男・四男がそれぞれ初代として茶道を継承したもので、表千家・裏千家・武者小路千家(別称は官休庵流)の総称である。

利休忌は陽暦(現在の日本の暦)の3月27日および3月28日に大徳寺で行われる。

### ■南坊宗啓

桃山時代の禅僧。『南方録』筆者で利休茶の湯の弟子、堺の集雲庵の二世住持を称した。文禄二年(1593)二月、利休二周忌に香華を手向け立ち去ったという。百年後、立花実山により、博多南坊流の祖として立てられた。

### ■立花実山

1655-1708。明暦~宝永年間の黒田藩士。『南方録』編者。父、立花平左衛門は黒田藩家老で、その次男として生まれる。通称、五郎座衛門、号、宗有・而生斎。八歳で藩主黒田光之に仕える。

茶の湯は、金森候茶堂道可より土屋宗俊に伝わる流れを学び、歌道・書・画をよくした。『南方録』の他、『岐路弁疑』『壺中炉談』など多くの茶書を残した。

### ■南方録

千利休の茶法を伝える秘伝書。古来数多い茶書の中でも、最も重要視されてきた茶道の聖典とよばれる名著である。

利休の高弟、南坊宗啓の聞書で、利休が奥書・印可を加えたという。「覚書」「会」「棚」「書院」「台子」「墨引」「滅後」の七巻より成る。このうち「墨引」までは、利休在世中に成立。「滅後」は利休没後の成立(当然利休の奥書・印可はない)と伝える。

利休没後、著者南坊宗啓自身とともに、その所在は長らく不明となっていた。しかし、元禄三年(1690)筑前福岡侯黒田綱政の家臣、立花実山がこれらを偶然発見、書写・編集したといわれる。

南方録全七巻を三部に分けると、第一部は「覚書」「会」、第二部「棚」「書院」「台子」、第三部が「墨引」「滅後」となる。第一部「覚書」は、利休の茶の伝統的な展開と、利休が創造した新しい茶の哲学、その根本理論を体系立てたものであり、「会」は、利休と著者宗啓が、豊臣秀吉を中心として営まれた茶会を記録したものであるということになっている。しかしこの会の記録は客観的な史料と整合性に乏しく、「利休百会記」をもとに他の茶会記録を付き合わせ、創作したものと推定されている。

第二部の「棚」「書院」「台子」は、利休の茶の詳細な技法の記録である。とりわけ「台子」は、一枚一枚の切紙五十余ものいわゆる切紙伝授を受けたものをまとめて一巻の巻物に仕立て、その全体をさらに利休が印可証明した、ということになっている。

第三部の「墨引」は、第二部の実技に対応して、曲尺割(かねわり)の法則という、「南方録」独特の厳密な茶法実演の美学を詳述したものである。この「墨引」は秘伝についてあまりに詳細に書きすぎることによって師、利休が墨を引いて消した、ということによってこの名がある。よって奥書はあるが印可はない。「滅後」も曲尺割について論じ、その他利休の説いた茶技・茶論を多方面に及んで取り上げている。

### ■南方録の名言

「家はもらぬほど、食事は飢えぬほどにて足る事なり」

「世塵のけがれをすすぐ為の手水ばちなり」

「叶うはよし、叶いたがるはあしし」

「茶の湯の肝要、ただこの三炭三露にあり」

「夏はいかにも涼しきやうに、冬はいかにもあたたかなるやうに」

「小座敷の道具は、よろづたらぬがよし」

「あけ暮外にもとめて、花紅葉が我心にある事をしらず」